

ソフトウェアシンポジウム 2019

討論テーマ(3) ビジネスと社会のためのソフトウェア工学に向けて:

Towards Software Engineering for Business and Society (SE4BS)

ポジションペーパー

谷口真也 (セイコーエプソン株式会社)

#### ■ 自己紹介

名前: 谷口真也 (たにぐちしんや)

所属: セイコーエプソン株式会社 DX 推進本部 IT 品質・生産技術革新グループ

業務: 製品ソフトウェア品質・生産性向上のための、開発プロセス改善・技術支援

#### ■ 現状

製品に求められる機能は年々増え続けており、ソフトウェアも大規模化と複雑化が進んでおり、ソフトウェア品質・生産性の維持・向上が求められている。要求定義から統合テストまでのいわゆる V 字プロセスの技術教育や設計現場の問題解決を通じて改善に取り組んでいる。

#### ■ 問題・課題

従来のソフトウェア工学の知見だけでは将来の商品開発の課題を解決できなくなると危惧している。IoT や DX の時代になり、新商品開発は、単体製品による機能を提供する「ものづくり」に加えて、お客様に価値をもたらす「ことづくり」に範囲を広げて取り組んでいかないといけない。現在の商品・サービスの開発プロセスでは正しい「ことづくり」を正しく進められているかどうかを客観的に判定する仕組みや成果物ベースでのステップが定義できない状況にある。

仮にそのような仕組みや定義ができたとしてもそれを実行できる人材の確保も難しい。商品開発のほとんどは製品機能の修正／継ぎ足しなどの保守開発になっているため、新しい機能を設計することや新しい価値の検討や定義の経験を持つ人は自然には増えていかない。新しい学びや経験の機会が必要だと考えているが、実際のところ何をしていけばいいかがはっきりと分かっておらず、投資の見返りも不明確なのでこの足を踏んでしまう状況にある。

アジャイルへの取り組みが上記の問題解決の一助になりそうなことは分かってきた。ただし計画性を重んじる企業活動における親和性はまだまだ低く、簡単に実践し始められる状況でもない。実践するときにも正しい人を選ばないと結果を出すことすらできないため、成果を上げることができずに普及に至らない状態に陥ったままになってしまう。

■ 討論したいこと

① 「ことづくり」の仕組みはどう作ればよいか？

要求工学、価値工学などの既存工学を併用するだけでいいのか、「ことづくり」の特殊性を考慮した融合や統合、さらに他の分野の知識体系との連携を含めた体系化が必要なのか？

② 理想的な「ことづくり」を実践できる人・チームはどの様に育てればいいのか？

「ことづくり」はどういう人が担っていくべきなのか？

今は、ものづくりとビジネスの融合だと考えているが、ものづくり側がビジネスを学ぶのがよいのか、ビジネス側がものづくりを学ぶのがよいのか。どちらも長けるようなキャリアパスを踏ませればいいのか。どちらもできる人が出てくるのを待って選抜するのか。複数人のチームで進められるのか。など。

③ アジャイルはどの様に計画性を重んじる企業に浸透していくのか？

要求が不安定な時にアジャイルで開発を始めた場合、要求が安定してきたらどの様に省リソースでの保守に移行すればいいのか？そもそも、アジャイルで開発での人の入れ替えやプロセスの変更はどこまで柔軟にできるものか？

以上